

日本産カニムシ研究 第 1 報

高 島 春 雄 Haruo Takashima

東京文理科大學動物學教室

内 容

I	緒 言	9
II	擬蠍目分類體系	12
III	日本に於けるカニムシ研究史略	18
III	日本産 <i>Microcreagris</i> 屬	25
V	主なる参照文獻	30

I 緒 言

日本の蛛形類は 6 目に配置される。蛛形類には總べてで 9 目あるが残りの 3 目は將來も日本版圖内に見つかる可能性はないかも知れぬ。のみならず既知 6 目の内でも全蠍目は敗戦の結果日本領土の削減と共に日本の動物と云へなくなつたし、脚鬚目も日本産はサソリモドキ 1 種きりといふ淋しさである。予は偶然の機會から東亞有毒動物の一環としてのサソリを、それと共にサソリモドキ類の調査に手を着けたが昨年 (1945) を以て東亞の蠍類の調査は一段落になつた。脚鬚類も東亞各地のものを調べる事が出来たが、更に一段の努力を以て東亞の此の類を概観し蠍類に於ける程度の成績を収めたく冀つて居る。諸カニムシ (アトビサリ) の仲間即ち擬蠍目は、日本では岸田久吉氏が久しい以前から格別の注意を拂はれ、其の後幾人もの同好者が夫々深入りせんと試みたが特に此の類の専攻家といふのは出現せずして今日に及んだ。此の類に關心を有する人は

いつも絶えないのに専門家が1人も出なかつたといふのは矢張りそれ相當の理由があつたからだと思ふ。岸田氏は此の類に日本で最も貢獻した學者で深い學識經驗を持つて居られるが、惜しいことに纏められたのは邦産Microcreagris屬の綜説位で、氏の抱負する新分類體系も今日まで具體化されない。近年廣島文理大の佐藤井岐雄博士が餘力を以て此の類の分類學的調査に當られるといふので予は大いにそれを期待して居つた所未だ本式に着手なさるうちに昨年8月6日の原子爆彈攻撃により戰災死を遂けられ一切空しくなつた。文獻カードなど作られた筈であるが今はどうにも仕様がな。此の儘にして居たのでは日本産カームシの究明は百年河清を待つに等しく實際問題上不便が多いので、サンリ調査一段落を機會に自身でカームシ研究にかゝらうと決意したのである。多くの同好者が結局深入りせずにしたつた研究上の困難は今から想像に難くないし、其の上予は戰火で此の類關係の文獻の多くを失ひ更に悪いことは予の屬する東京文理大動物學教室所藏文獻が今日未だに疎開先に滯留して東京に戻つて來ないことである。併し色々な困難を克服して出来るだけ進捗させたいと昭和20年の年の瀬迫る頃からカームシの勉強に取りかゝつたのである。予は此の機會に御激勵下さる北海道帝大内田亨教授に遙かに敬意を表する。又九州帝大江崎第三教授は貴重な文獻を貸與され尙種々御厚配を受けた。關口晃一氏並びに蒲生重男氏は所持する文獻標品を予の自由使用に任されお蔭で調査土多大の便宜を得た。之等の恩惠者に深き謝意を捧げねばならぬ。東京帝國大學理學部動物學教室（主任岡田要教授）、東京文理科大學動物學教室（主任丘英通教授）に夫々藏せられる貴重文獻を利用出来たことも誠に有難い次第であつた。

大槻文彦博士の「大言海」アトビサリの條に曰ふ「アトビサリ」後退アトシザリの轉。江戸つ子の發音にヒをシと云ふこと常なるに反對にシをヒと云ふこともあり。濁音轉倒す」と。アトビサリはアトシザリから轉じたものなること明かである。「大言海」に據るとアトビサリはスリパチムシの異名でもある。此のス

リパチムシはアリチゴクのことであトズサリとも稱し「行くにあとへしざる」からだと解説してある。併し種毎の標準和名としてはカニムシを基稱として用ひるのが便利のやうに思ふ。カニムシは蟹蠱の義であるが此の名は古いものでなく江戸時代の本草書などにも見當らぬ。岸田氏 (1915) が指摘して居られるやうに、谷津直秀博士が動物學雜誌第 20 卷第 238 號 (1908) にエリングセンの邦産カニムシ研究を紹介した時に作られた新名であると思ふ。そして此の稱は岸田氏により強く支持されて今日に至つて居るのである。カニムシの仲間擬蠍目 (ギゲツモク) で此の通り讀めばサンリモドキであるが、サンリモドキの稱は夙に脚鬚目のものに占められ動物學者間に普及して居るので、彼此混淆を避ける爲カニムシ類にサンリモドキの稱を導入しないやうにしたい。併し英語でも False-scorpion 或は Pseudoscorpion といふ。一寸サンリに似てゐるけれども丸腰で、サンリの後腹部 (尾部) に當る所が分化せず従つて毒囊や毒針も見られない。それにどれもサンリよりはひどく小さい。英名には尙 Book-scorpion, Book-crab, Chela-spinner 等がある。カニムシは屋内で書架の間に隠れ書物の中から現れることがある。書物を食害するシミやダニを捕食する爲かういふ所にも棲むのだと云はれる。獨語でも Bücherskorpion と稱する。尙獨語には After-scorpion, Moosskorpion, 英語と同じ形の Pseudoscorpion 等もある。Moos は蘚苔である。After は肛門とか尻とかの義で尾部を缺き丸腰といふことを表して居るのであらう。目名 (學名) にも異名多く Acera, Cheliferidea, Chelonethi, Chelionethida, Chernetes, Chernetidae, Chernetidea, Pseudoscorpia, Pseudoscorpiones, Pseudoscorpionida, Pseudoscorpionidea 等様々あるが (詳細の Synonymy は Beier の Monograph の巻頭を覽よ) Chamberlin (1929) は Thorell の Chelonethida が良いとして居り、Beier (1932) は Pseudoscorpionidea にして居る。予は單に最も舊いといふ理由のみで Pseudoscorpiones を採る。

II 擬 蝎 目 分 類 體 系

目内の分割に關しても Chamberlin (1929, 1931) と Beier (1932 a, b) とで説が違ふ。他の節足動物にも見られる如く當初は亞目にまで分割されず單一の科に總べての種類が包有されて居る。古く Simon の頃は Cheliferidae 1 科だけでそれが 3 亞科に分れり屬が配置されてあつた。亞目に分けた創めの人 Balzan (1891) で鋏角 (大腮) の指 (動指) に存する serrula (serrula exterior) といふ櫛齒狀構造が指の全長に互つて在るか、其の先端部が遊離して居るかに着眼し全櫛亞目 *Panctenodactyli* と半櫛亞目 *Hemictenodactyli* とに分つた。けれども Chamberlin (1929) は此の體系を貶し 2 團 3 亞目に配分し 1931 年の大著に於て一層之を強化した。氏のは總べて 3 亞目 6 上科 18 科であるが、異跗性 *heterotarsate*, 同跗性 *homotarsate* といふ語を用ひ先づ此の形質から 2 團に區分した。前方 2 對の歩脚の跗節は分節せず、後方 2 對の跗節は前跗節 *metatarsus* と跗節 *tarsus* とに分節する——其のやうな範疇に入るのが第 1 團異跗類* *Heterosphyronida* (第 1 亞目異跗亞目* *Heterosphyronida*) である。4 對とも跗節が分節しないか、4 對共跗節が分節する——さういふのが第 2 團同跗類* *Homosphyronida* で 4 對共跗節は前跗節と跗節とに分岐するのが第 2 亞目複跗亞目* *Diplosphyronida* (但し *Synsphyronus* のみ例外)、4 對共跗節は分岐しないのが第 3 亞目單跗亞目* *Monosphyronida* である。重跗亞目の内、鋏角の動指 (即ち鋏角の第 2 節) は數齒を裝ふものがネオビシウム上科* *Neobisioidea*, 單一の齒のみを裝ふものがガリブス上科* *Garypoidea* であり、單跗亞目の内、4 眼を具へるのがフェアイラ上科* *Fealloidea*, 眼は 2 箇あるか或は全く缺如し且つ同腿性 *homofemorate* なのがケイリディウム上科* *Cheiridioidea*, 同前で異腿性 *heterofemorate* なのがケリフェル上科* *Cheliferoidea* である。

* 和 名 新 稱

Beier (1932a) が Das Tierreich, Lieferung 57 & 58 に用いた體系は 3 亞目 5 上科 16 科で約 160 屬 800 種の全世界のカニムシを總攬した。同年 (1932b) 氏が Kükenthal-Krumbachs Handbuch der Zoologie に擬蝎目を綜説したのでは科の数は 17 になつて居る。兩學者の體系を比較表示すると次の通りである。大綱に於てはよく一致しバイエルのはチニムバリンのを換骨脱胎したものだと言つても必ずしも不當ではない。予は分類體系は Beier (1932b) に従ふ。カニムシ類は斯くの如く種數多く、學界未知のものも尙相當あるだらうことが推測される。日本産 (舊日本帝國としての地域内で) は岸田氏に據れば 60 種に及ぶといふ。

Chamderlin		Beier
I Heterosphyronida	團	
I Heterosphyronida	亞 目	1 Chthoniinea
1' Chthonioidea	上 科	
{ 1'' Dithidae	科	{ 1'' Dithidae
{ 2'' Chthoniidae		{ 2'' Chthoniidae
II Homosphyronida	團	
2 Diplosphyronida	亞 目	2 Neobisiinea
2' Neobisioidea	上 科	1' Neoisides
{ 3'' Syarinidae	科	{ 3'' Syarinidae
{ 4'' Neobisiidae		{ 4'' Neobisiidae
{ 5'' Hyidae		{ 5'' Ideoroncidae
{ 6'' Ideoroncidae		
3' Garypoidea	上 科	2' Garypides
{ 7'' Menthidae	科	{ 6'' Menthidae
{ 8'' Olpiidae		{ 7'' Olpiidae
{ 9'' Garypidae		{ 8'' Garypidae
3 Monosphyronida	亞 目	

4' Feaelloidea	上 科	3' Feallides
{ 10'' Feallidae	科	{ 9'' Feallidae
{ 11'' Pseudogarypidae		{ 10'' Pseudogarypidae
		{ 11'' Synsphyronidae
	亞 目	3 Cheliferinea
5' Cheiridioidea	上 科	4' Cheiridiides
{ 12'' Cheiridiidae	科	{ 12'' Cheiridiidae
{ 13'' Pseudochairidiidae		{ 13'' Sternophoridae
{ 14'' Sternophoridae		
6' Cheliferoidea	上 科	5' Cheliferides
{ 15'' Myrmochernetidae	科	{ 14'' Myrmochernetidae
{ 16'' Chernetidae		{ 15'' Chernetidae
{ 17'' Atemnidae		{ 16'' Atemnidae
{ 18'' Cheliferidae		{ 17'' Cheliferidae

Beier (1932b) の編した擬蝸目の科までの検索表を譯出して次に掲げる。

- 1- 歩脚附節の節數は同じからず。前方 2 對のものは節數は各 1, 後方 2 對のものは各 2 節である……………Chthoniinea 亞目(2)
- 一步脚附節の節數は何れも同數……………(3)
- 2 氣門は傾ける位置で、特に半圓形の氣門蓋板を具へる。雌の性域は大きく、キチン化して居る。第 4 歩脚に於ける基腿節は端腿節よりもほんの僅か短い……………Dithidae
- 一氣門は横位である。特別の氣門蓋板を缺き其の代りに胸板の側突起によつてのみ被はれる。雌の性域はキチン化して居ない。第 4 歩脚の基腿節は端腿節よりも著しく短い……………Chthoniidae
- 3 全歩脚共附節は 2 節、稀に 1 節のこともある。而して背甲にはよく發達した 4 眼を有する……………Neobisiinea 亞目(4)
- 一全歩脚共附節は 1 節、背甲は 4 眼を有することは無い……………Cheliferinea 亞目(12)

- 4 歩脚の跗節は2節となる……………(5)
 一歩脚の跗節は1節きり……………Feaellides 上科(10)
- 5 缺角に於ける動指は其の中央縁が明瞭な鋸齒狀を呈し亞尖體又は亞尖牙を具へない。薄片體は常に基部まで分れて居て互に融合することはない。背甲前縁は幅廣くえぐられ大抵は口上突起を有する。第2跗節の亞末端毛は大抵分岐して鋸齒狀又は他の形に變化するが稀に單一なものもある……………
 ……………Neobisiides 上科(6)
 一缺角の動指中央縁は鋸齒狀を呈することなく、單一の鈍き稀には二次的に二つの部分より成る亞尖體又は亞尖齒を具へる。薄片體は基部に於て幾分融合し一様な膜を形成する。背甲前縁は大抵狹まり屢々其の縁邊に缺刻が見られる。口上突起は無い。第2跗節の亞末端剛毛は單一にして尖銳……………
 ……………Garypides 上科(8)
- 6 脚鬚不動指にのみ毒腺を具へる。同じく動指は端齒よりも手前のほうに、不動指の端鉤爪即ち毒牙を受ける爲の筒狀又は溝狀のくぼみを有する ……(7)
 一脚鬚兩指に毒腺を具へる……………Ideoroncidae
- 7 第4歩脚の基腿節と端腿節との間の分離線は脚の伸長方向に垂直。腹部の側膜 (Pleuralmembran) は顆粒に富む……………Neobisiidae
 一第4歩脚の基腿節と端腿節との間の分離線は脚の伸長方向に斜である。腹部側膜にはこまかな縦斑がある……………Syarinidae
- 8 脚鬚兩指は毒腺を具へる。動指は不動指の毒牙を受ける爲のくぼみを有しない。缺は12又はそれより少き觸毛を有する普通の齒を具へる。背甲は其の形様々であるが次者の如きは無い……………(9)
 一脚鬚不動指にのみ毒腺を有する。動指は不動指の毒腺を受ける爲のくぼみを末端に持つ。缺には12本以上の觸毛が見られる。背甲は強くキチン化し異常に延長して居る……………Menthidae

- 9 腹部側膜は平滑均一な條斑を有する。背甲の前端近くは狭まらぬか或は僅かに狭まり所謂三角形ではない。腹部は背甲より幅廣くないか或は僅かに廣いし、殆ど平行的側面を有する。脚鬚の腿節と脛節の剛毛は可成り強剛で明かに認められ單一で尖鋭である…………… Oрпиidae
 腹部側膜は顆粒に富むか又は短い波狀の條斑を有する。背甲前縁は著しく狭まり三角形となる。腹部は背甲より遙かに幅廣く殆ど卵形である。脚鬚腿節及び脛節の剛毛は短くて不分明、急に尖つて居る…………… Garypidae
- 10 背甲は Garypides 型ではない、前方に於て著しく扇狀になつては居ない。眼の前方には2箇或はそれ以下の裂片又は角狀の突起部を有する。胸部或は腹部の側板を持つ。指に毒腺は無い。第1歩脚と第4歩脚とは多少形を異にする…………… (11)
- 背甲は Garypides 型で前方は顯著な扇形。角狀の突起は無い。胸部及び腹部側板は缺けて居る。第1歩脚と第4歩脚とは大いに其の形狀を異にする…………… Synsphyronidae
- 11 背甲と腹部との間には特別の關節が無い。腹部には側板が無い。脚鬚の形は尋常…………… Pseudogarypidae
- 背甲と腹部との間に特別の關節がある。腹部は側板の腹面及び背面の線を有する。脚鬚は異形を呈する…………… Feaellidae
- 12 第1, 第2歩脚の基及び端腿節間の關節は第3, 第4歩脚のそれと同様同一の外形を有し此處は同様に不分明か或は缺く。それ故に總べての歩脚の腿節は同様の構造をなす。大抵の種類は極めて小形である…………… Cheiridiides 上科 (13)
- 第1, 第2歩脚の基及び端腿節間の關節は第3, 第4歩脚から明かに離れ而して常に廣い。故に總べての歩脚の腿節は異なる構造を呈する。大抵中形から大形までの種類である…………… Cheliferides 上科 (14)
- 13 頭胸部は歩脚基節間に擬胸板を缺き、可動蓋板 (Cucullus) を有し Garypides

- 型。歩脚は5~6節。後者の場合は基及び端腿節間の分裂線は脚の伸長方向に斜にある。不動指のみが毒腺を有する……………Cheiridiidae
- 一頭胸部は1箇の明瞭にして卵形且つ基節より隔離された擬胸板を有する。Cucullus は缺如する。背甲は前方に廣くなる。脚は6節。基及び端腿節間の分裂線は垂直。脚鬚兩指に毒腺を有する……………Sternophoridae
- 14鉗角の基及び亞基部剛毛がある場合は内側のものより或は薄板のものより明かに短く、棍棒狀を呈しない。併し亞基部剛毛は通常缺けて居る。3又は4、極めて稀には2本の鞭毛狀剛毛(Flagellumborsten)を有する……………(15)
- 一鉗角の基及び亞基部剛毛は内側のもの又は薄板剛毛よりも長くはなく、幅廣く、棍棒狀。2本の鞭毛狀剛毛を有する……………Myrmochernetidae
- 15脚鬚兩指又は動指のみが毒腺及び毒牙を有する。附屬の齒は第1の場合は無く第2の者には常にある。第4歩脚鬚節の觸毛は基部には決して見られない……………(16)
- 一不動指のみが毒腺及び毒牙を有する。附屬牙は無い。第4歩脚鬚節の觸毛は大抵基部にある。極めて稀にはもつと中央に向つて押しやられて居ることがある……………Atemnidae
- 16附屬牙は少くともより少數存する。脚鬚動指のみ毒腺、毒牙を具へる。極めて稀には不動指に於ても痕跡的毒牙を有する。而も附屬牙は顯著である……………Chernetidae
- 一附屬牙を缺く。脚鬚兩指は同等に發達せる毒牙、毒腺を有する…Cheliferidae

邦人學者では岸田久吉氏の分類體系がある。氏は1929年「豫て懷抱する環節結構論を主とし、此に歩脚の腿跗兩節の性狀及上顎の鋸性を加味して新體系を得て居る」とて其の輪廓のみを示された。氏は背甲上に1—2本の横溝を有するものを裂脊亞目 Schizonota、それを全缺するものを全脊亞目 Holonota に二大

別し各亞目に上科、科を下表の如く按配された。

亞 目	上 科	科
1 Schizonota	1 Cheliferoidea	1 Cheliferidae
	2 Garypoidea	2 Garypidae
		3 Cheiriliidae
2 Holonota	3 Atemnoidea	4 Atemnidae
	4 Feaelloidea	5 Feaellidae
		6 Pseudogarypidae
	5 Chthonioidea	7 Tridenchthoniidae
		8 Chthoniidae
	6 Ideobisioidea	9 Ideobisiidae
	7 Olpioidea	10 Olpiidae
	8 Obisioidea	11 Obisiidae

後 1940 年「科學畫報」に「シノツカカニムシに就て」なる 1 篇を寄せられたが、それでは全世界の現世カニムシは 2 亞目 8 上科 24 科 55 亞科 89 群 232 屬 845 種となつて科の數が飛躍的に増加して居るが、生憎和名だけで學名の提示がないので判りかねる。兎に角折角の新體系も豫告篇だけで本文は今日に至るも發表なさらぬので、後進の吾等其の恩澤に浴することが出來ず前記 2 氏のと對比する便宜を持てぬのは残念である。

Ⅲ 日本に於けるカニムシ研究史略

曩に「此の類に關心を有する人はいつも絶えないのに」と記したが其の古往今來の古往の方の 1 例を挙げると、江戸時代小原良直(桃洞)の著「桃洞遺筆(第肇集)」卷下(卷 三)九一十(天保 4 年刊)に圖入りで食巖蟲なるものが説明されてある。上方に表、下方に裏の全形圖を表し、それが明かにカニムシ 1 種を寫したものである。紀州熊野の海岸の石下で見つけ食巖蟲(イシクヒムシ)の

名で記録したのである。單眼が昆蟲の複眼のやうに寫されて居るのを瑕瑾とすべきであらう。此の圖は江崎博士の「多足類蜘蛛類」(岩波講座生物學)にも複寫が掲げられてある。惜此の食巖蟲は紀州の海岸に限らず之と環境を同じくするやうな太平洋岸であつたら他地にも棲息して然るべきである。而して關口晃一氏は既に伊豆下田に於て獲て居る。氏は昭和14年9月24日静岡縣賀茂郡下田町の東京文理大臨海實驗所近くで1頭を獲た。かのクイシクヒムシクを想起し歸來植村利夫氏に此のことを告げた所、それと同一の種類が和歌山縣(紀伊)で多數に採れて植村氏自身も多少調べたことがあると聞かされた。それは同縣南部町の尾崎光太郎氏が數回に互つて標品を送附して居たからである。關口氏は尾崎氏採集のカムシと下田のそれとを比較し兩者が同一種なることを確かめた。紀州の海岸のカムシは江崎博士も標品を御覽になつたことがある由。尾崎氏から採集の時の模様を關口氏宛報じた書信を引用すると次のやうである(尾崎氏は農を業とせられるが動植物に興味を持ち殊に貝の蒐集に御熱心な篤志家である)。

◦日高郡南部町山内の自宅から約1軒隔たる目津崎海岸は相當廣い荒磯ですが去る昭和十二年十二月末頃同所のボロボロと少し力を入れるとはぎとれる岩を何か無きかとめぐり居つた所出て來たのがカムシでした。他には何の生物も見られず全く岩と岩との間にはさまつて齧いて居りました。同所には一時間も檢せば十頭や十五頭は得られる程度に生存して居ります。満潮線から五米位上部、海岸の陸産植物地帯から五・一十米位下部、その中間の全く無毛の岩の間です。昨夏の調査では同じ岩の間でアリ的一種、アサヒユビグモ、イソハヘトリグモ等も見つけ又極く細小な昆蟲が時々岩にとまつて居るのも見つけました。無毛と言つてもよく見れば矢張り訪ふ友もあるもの哉。更に本年二月五日南部町から約十軒西へよつた日高郡名田村海岸で石ころの間で數頭捕へました。又この話を和歌山師範學校博物科岡本清氏に致しました所、氏もいつか日高郡白崎村海岸でこのカムシと同一種と見られる物を發見された事ある由承りました。(昭和15年5月1日附)

更に同年10月9日附尾崎氏より關口氏宛の御葉書には

◀本日カコムシ採集に参りました所幸相當多數に採集出來ました故別封御送り致します。
中に一個幼蟲の入つた住居をそのまま捕へました故入れました。御注意下さい。棲息所の
岩の間に卵囊か住居かと思しき物は時々見ましたが本日それは子を育てる時の住居である
事を發見しました。こんな形になつて子と共に親が一頭入つて家庭を形づくつて居まし
た。標本は形が變になりましたが圖の如き形で、圓筒形の短い物で上下共草を張つてその
中に入つて居ります。子の數は全部で五十頭です。

關口氏は之等の標品に基き見事な圖を作つたが種名のほうは參考文獻不足で
確定出來ないので、標品を斯界の巨匠 J. C. Chamberlin に送附し同定を乞うた
がどうしたものか全く返事を入手することが出來ずに終つた。植村氏は昭和15
年2月東日小學生新聞に「新しい蜘蛛のお話」と題し蜘蛛類小話を連載された
が、其の第2回分(2月14日)に「變りもの食ひのイソカコムシク」といふ見出し
で本種のことを紹介し關口氏描く全形圖を掲げ尙イソカコムシと和名を定めた
終戦後昭和20年9月20日カコムシ採集に熱心な少年蒲生重男氏は神奈川縣江ノ
島にイソカコムシを搜してそれを獲たのみならず、同じ所で測らずも珍品フサ
ヤスデの仲間を多數採集するといふ大手柄を樹てたのは人の識る所である。食
巖蟲の名は與へられて居ても果して食巖の事實ありや否や大いに怪しいと思
ふ。

日本のカコムシ類の科學的研究は Ellingsen (1907) により先鞭をつけられた。
氏の報文により谷津直秀博士(1908)は「日本産カコムシ類」の題下に動物學雜
誌上に紹介された。日本カコムシの幾つか々其の天籍を明かにされたのは Elli-
ngsen 以來である。即ち次掲の通り。

Chelifer bicarinatus Sim.; *C. boncicus* Ksch.; *C. sauteri* n. sp. [エリ
ングセンの命名], *Ideobisium* sp.; *Microcreagris gigas* Balz. var. *japonica*;
M. granulata n. sp.; *M. pygmaea* n. sp.; *Obisium japonicum* n. sp.; *O.*
pygmaeum n. sp.; *Chthonium japonicus* n. sp.; *C. opticus* n. sp.

Ellingsen は 1912 年には Hans Sauter の蒐集品に基き臺灣から 2, 3 の新カニムシを報じた。岸田久吉氏は 1915 年京都で發行の「サイエンス」に「カニムシに關する研究」を公表されたが、之は邦人學者の手に成る最初のカニムシ綜説として注目すべきもので、五、日本産カニムシ目録には次の如き種類が列擧されて居る。之又注目に値する。而して 3, 4, 5, 7, 8, 15 は何れも氏が新に提唱されたのである。併しどういふ事情によるのか新名の提唱だけで爾後記載を發表なさらぬから、之等の新名は何れも *nomen nudum* であつて其の故か Beier の世界のカニムシを總攬した 2 冊 (1932) にも全く引用されて居らぬ。

Cheliferoidea

Cheliferidae

1. *Chelifer bicarinatus* E. Simon 和名未定
2. *Chelifer bonicus* F. Karsch 和名未定
3. *Chelifer nipponicus* K. Kishida カニムシ 丹後の人家
4. *Chelifer ellingseni* K. Kishida タカノカニムシ 丹後の山中
5. *Chelifer odateanus* K. Kishida オホダテカニムシ 羽後の人家
6. *Chelifer sauteri* E. Ellingsen 和名未定
7. *Chelifer sasakii* K. Kishida ササキカニムシ 東京市の人家

Obisioidea

Ideobisiidae

8. *Ideobisium nipponicum* K. Kishida ヒロカニムシ
9. *Microcreagris gigas japonica* E. Ellingsen 和名未定
10. *Microcreagris granulata* E. Ellingsen 和名未定
11. *Microcreagris pygmaea* E. Ellingsen 和名未定

Obisiidae

12. *Obisium japonicum* E. Ellingsen コブカニムシ
13. *Obisium pygmaea* E. Ellingsen 和名未定

Chthoniidae

14. *Chthonius japonicus* E. Ellingsen イボカニムシ
 15. *Chthonius yatsui* K. Kishida ヤツイボカニムシ 京都の人家
 16. *Chthonius opticus* E. Ellingsen 和名未定

1920年岸田氏は臺灣産の1種 *Microcreagris formosana* に就き6頁の自刊印刷物を作られたが現在では國內に1部も残存して居らぬらしく予は今日まで覽ることが出来ない。日本動物圖鑑は1927年に上梓されたが此の中に於て岸田氏は

Chelifer nipponicus Kishida カニムシ (本州産)

Obisium pygmaeum Ellingsen カクカニムシ (異名チビヨツメカニムシ 本州産)

Chthonius japonicus Ellingsen ヨツメカニムシ (異名アギトカニムシ、ツチカニムシ 本州・四國・九州・臺灣の産)

等の3種を圖説された。翌1928年氏は "Pseudoscorpions (*Microcreagris*) of Japan" を日本動物學彙報に發表せられた。當時既知の日本産 *Microcreagris* 屬各種に1新種 *Microcreagris cyclica* の記載を添へたもので、之は邦人學者により正式に記載された最初の新カニムシである。1929年岸田氏は *Lansania* 誌上に「カニムシ類分類上の標準」を發表された。之は重要な内容を持つものであるが前述の如く豫告篇で極めて約説されたのに止まつたのは惜しい。

1940年、哈爾濱日本中學校4年生篠塚安久氏が前年偶然採集した2頭のカニムシをかねて岸田氏にお送りしてあつたのだが、此の年になつて *Chelifer* 屬の新種と判明、岸田氏が學名を *Chelifer chamberlini* Kishida、和名をシノツカカニムシと定めて發表されることになつたといふので、其の趣が東京朝日や東京日日に寫眞入りで特報され此の熱心な少年の手柄が廣く世間に紹介された。然るに學者の説明不十分や一般人の誤解もあつて色々と説を成す人が現れ、カニムシが日本に於て空前と稱すべき程人々の話題になり、シノツカカニムシ事件として永く吾々の腦裡を去らないのである。併し岸田氏は「科學叢報」に「シノ

ツカカニムシに就て」なる啓蒙的の記事をお寄せになつただけで正式の記載を遂に發表しなかつたのはどういふ事情によるものか、篠塚少年に對し同情に堪へない。岸田氏は該誌上に於て全世界(及び日本)のカニムシ分類表といふものを掲げ、之は前述の如く氏の1929年の分類體系に変更を加へ科の數などずつと多くなつて居るのであるが、何分にも和名だけで學名を伴つて居ないので不便である。刮目すべきは氏は「日本産現生カニムシは、二亞目、七上科、十科、二十亞科、二十八群、四十三屬、六十種が記載済みであつて、尙ほ手許に處理中のものが若干ある。多分今後、各地に於て、なほこの上に二~三十種位は發見されることであらう」と記して居ることである。併し之亦今日まで一向に御發表にならぬので國內國外の研究者は窺知し得ない。

米の Chamberlin は1929—30年出版の力作中に日本産の標品に基き幾つかの新カニムシを創設した。獨の Beier は1931年臺灣産につき新カニムシの記載をしたが翌年 Das Tierreich の Lieferung 57 及び 58 として全世界のカニムシ類を總攬した。其の中に收載された日本及び臺灣産のカニムシは僅かに次の22種で邦人の定めた學名を持つ種類は一つだけ、又引用された邦人學者の業績は岸田氏の1915年のもの(サイエンス所載和文)と1928年のもの(日本動物學彙報所載英文)2篇のみである。Beier の此の措置は穩當であると思ふ。

- 1 *Mundochthonius japonicus* Chamberlin (霧島山)
- 2 *Allochthonius opticus* (Ellingsen) (岡山)
- 3 *A. shintoisticus* Chamberlin (九州)
- 4 *Tyrannochthonius japonicus* (Ellingsen) (日本、臺灣、本種は *Unsichere A. rten* としてある)
- 5 *Neobisium* (*Parobisium*) *magnum* Chamberlin (原記載には "*Moghi* (Kyushu)" とある)
- 6 *N.* (*Parobisium*) *flexifemoratum* Chamberlin (原記載には "*Muchogo-o* (?), Japan" とある)

- 7 *N. (Parobisium) imperfectum* Chamberlin (原記載には "Muchigo-o, (? Japan" とある。此の亞屬には他に北米産の1種あるのみ)
- 8 *Roncus (Roncus) japonicus* (Ellingsen) (山中—富士山麓、神奈川)
- 9 *Microbisium pygmaeum* (Ellingsen) (根岸、岡山、神奈川)
- 10 *Microcreagris brevidigitata* Chamberlin (霧島山)
- 11 *M. japonica* Ellingsen (日本)
- 12 *M. cyclica* Kishida (日本)
- 13 *M. formosana* Ellingsen (臺灣、比律賓)
- 14 *M. pygmaea* Ellingsen (日本)
- 15 *M. granulata* Ellingsen (日本)
- 16 *Ideobisium formosanum* Ellingsen (臺灣。之は後1937年 Beier により *Mic. ocreagris pusilla* Beier と改名された)
- 17 *Geogarypus (Geogarypus) formosanus* Beier (臺灣)
- 18 *Cryptocheiridium formosanum* (Ellingsen) (臺灣)
- 19 *Haplochernes boncicus* (Karsch) (日本、臺灣)
- 20 *Chelifer canroides* (Linnaeus) (汎世界的と云つても宜い種類。日本にも産する)
- 21 *Lophochernes sauteri* (Ellingsen) (日本)
- 22 *L. bicarinatus* E. Simon (日本)

又 Beier は 1937 年臺灣高雄産に基き *Allowithius australasiae formosanus* なる新亞種を設定した。前記日本及び臺灣産カニムシ目録に之を加算すべきである。以上の他に邦人研究者により日本産として單に名稱を挙げ或は圖示せられたカニムシの例に次の如きものがある。*Blothrus* sp. [Esaki, 1930]; *Speleochthonius* sp. [Komatsu, 1942]; *Maorichthonius* sp. ? ユリカニムシ [Nakatsudi, 1942]

之を要するに日本カニムシ相は未だ極めて不分明である。二十數種に盡きる。

管がない。戦後の新日本領土内のカニムシの種類調べから先づ着手すべきである。上述の如く岸田氏は日本でカニムシ研究に最も貢献された學者であるが他に此の類に格別の注意をなされた方々に江崎悌三、故佐藤井岐雄、丹羽彌、故仲辻耕次、關口晃一、森川國康、蒲生重男の諸氏がある。

Ⅲ 日本産 *Microcreagris* 屬

Microcreagris Balzan (1891)

Balzan, Ann. Soc. Entomol. Fr., tome lx, p. 543 (1891)

Ellingsen, Nyt. Mag. f. Naturv. Christiania, Bd. xlv, p. 6 (1907)

Kishida, Annot. Zool. Japon., vol. xi, no. 4, p. 407 (1928)

Chamberlin, Ann. Mag. Nat. Hist., ser. 10, vol. v, no. 25, p. 23 (1930)

Beier, Tierr., Lief. 57, p. 148 (1932)

本邦産カニムシの内で最も纏つて居るのは(唯一のものでもあるやうだが)本屬である。此の屬はネオビシウム科 *Neobisiidae* Chamberlin (1930) に隸する。此の科は *Neobisiinae* Chamberlin (1930) と *Ideobisiinae* Chamberlin (1930) との2亞科に分割されるが本屬は後者に入り1934年に於て37種を含み其等は舊北區、新北區、東洋區に及び熱帶、亞熱帶、溫帶に互つて見られる。民國北平(北京)産 *M. gigas* Balzan, 1891 を模式種として Balzan により設定された屬である。Redikorzev (1917) は本屬を *Ideobisium* の亞屬として扱つたが他の學者は何れも獨立の屬と看做す。岸田久吉氏(1928)は *Ideobisiidae* と科に昇格させ *Microcreagrinae* なる亞科を設けて本屬を収めた。

岸田氏(1928)は當時の日本産種として *M. japonica* Ellingsen, *M. cyclica* Kishida, *M. granulata* Ellingsen, *M. formosana* Ellingsen, *M. pygmaea* Ellingsen の5種を挙げた。此の内 *cyclica* は此の時設定された新種であり *M. japonica*, *M. formosana* は共に變種又は亞種から獨立の種に繰上つた新組合(comb. nov.)である。次に Chamberlin (1930) は當時の日本關係の種類では *M.*

brevidigitata Chamberlin, *M. japonica*, *M. formosana* の3種に言及した。初出のものは新種である。Beier (1932) は本属に隸するもの世界に34種、他に怪しいもの4種ありとし、日本産としては *M. brevidigitata*, *japonica*, *cyclica*, *formosana*, *pygmaea*, *granulata* の6種を挙げた。之は當然の措置であるが他に *M. silvestrii* Chamberlin なる種の産地を "China: Ychan, Liu-Kiu-Inseln" と記してあるので (p. 146) 気になる。それは Liu-Kiu-Inseln が琉球諸島かも知れないからである。Chamberlin の原記で覽ると "Holotype, ♂, Ychyhan (China ?)" とあり民國といふのも決定的でないし琉球たることも示してない。此の標品はイタリーの知名の昆虫學者 Silvestri が採集したものらしく現に種名も同氏に捧けられてある。江崎悌三博士に御高教を願ひ、「Ychyhan といふのが何地であるのか全く不明であるが X. 24. 1925 に採集とある日附から見ると Silvestri が二度目の日本來朝後朝鮮から滿洲を経て歸國した時の採集であるから北支か滿洲方面ではなからうかと考へられる。Silvestri は琉球には旅行してない」との御返事を得た (御厚志を深謝するものである)。Beier が何を根據に産地を "Ychan, Liu-Kiu-Inseln" と書き更めたのか知るを得ないが *silvestrii* を日本産 *Microcreagris* に算へるには及ばないと私は判斷する。更に1937年 Beier は *Ideobisium formosanum* Ellingsen の属の所屬正しからざるを發見し後述の如き事情で *M. pusilla* なる新名 (nom. nov.) を提唱した。それで一時日本産は7種に及んだが終戦後の新日本の地域では *formosana* と *pusilla* が除かれねばならぬ。仍つて以下は日本及び臺灣産 *Microcreagris* と稱へるのが正當である。

1 *M. brevidigitata* Chamberlin

1930 *M. brevidigitata*. Chamberlin, Ann. Mag. Nat. Hist., ser. 10, vol. v.no. 25, p. 26

1932 *M. b.*, Beier, Tierr., Lief. 57, p. 146

原記には "Holotype, ♀, Mte. Kirishima, Japan. Coll. ix. 20. 1924 by Dr.

Silvestri” とあるが江崎博士の御教示に據れば 1925 年の誤である。其の後採集した人あるを聞かない。原記には「鉗の動指には 40 乃至 42、不動指には 33~34 箇の縁齒がある。背甲は長さは幅よりほんの僅か勝り、發達の良くない 2 對の眼を具へるが其の前方の對は後方の對から眼の直径の $\frac{1}{4}$ 程離れて居り背甲前縁からは 1.5~2.0 倍隔たつて居る。其の前縁には微かな 1 上口突起が見られる。刺毛式(chaetotaxy)は 4—10 (28) である。鈇角端刺毛は 4 本。背板には 13~14 本、腹板には 16~18 本の縁毛がある。腹板上に盤狀刺毛は認められぬ。觸鬚は短太で殆ど平滑。轉節の長さは幅の 1.8 倍、腿節は最太部に於て基端よりの長さの $\frac{1}{3}$ に達する。其の前縁に沿ひ粗に顆粒を有し、長さは幅の 2.4 倍である。脛節には柄部頑丈、長さは幅の 1.9 倍、柄其のものは幅は長さに等しい。鉗は長さは幅の 2.3 倍、手は短くすんぐりした指部の 1.7 倍、指部は手の幅を超えることはまもない。體長 3.5 耗」とある。目下の所日本特産カムムシである。

2 M. japonica Ellingsen

1907 M. gigas var. japonica Ellingsen, Nyt. Mag. f. Naturv. Christiania, Bd. xlv, p. 7

1915 M. gigas japonica, Kishida, Science, Kyoto, vol. v, no. 9, p. 367

1928 M. japonica, Kishida, Annot. Zool. Japon., vol. xi, no. 4, p. 408

1930 M. japonica, Chamberlin, loc. cit., p. 28

1932 M. japonica, Beier, loc. cit., p. 148

本種を種に昇格せしめたのは岸田氏であるが Chamberlin(1930) も之を gigas の 1 型と看做すことは不賛成だとして居る。Chamberlin の檢した材料は 1910 年 9 月伊豆で S. Akiyama の採集した 1 匹と民國の “Chofu” で 1924 年 11 月 11 日 F. Silvestri 採集の 1 匹とである。本種は種名の如く本州(神奈川、静岡、山梨、岡山の諸縣)山地にのみ棲息するものと従來看做されて居たが Chamberlin の記録により分布は民國及び日本となる。S. Akiyama は秋山重美即ち後の石井

重美氏（今は故人）のことである。“Chofu”は民國のどこなのか私には分らない。

3 *M. cyclica* Kishida

1928 *M. cyclica* Kishida, loc. cit., p. 409, figs. 1, 2

1932 *M. cyclica*, Beier, loc. cit., p. 148

目下の所日本特産カムシで本州だけから知られる。岐阜縣惠那郡福岡村下野で丹羽彌氏が採集された亞成體の♀が holotype となつて居る。爾後採集されたことはないやうである。Holotype は幸に戰災を免れ現在岐阜縣に御在住の丹羽氏のお手許に保存される。

4 *M. granulata* Ellingsen

1907 *M. granulata* Ellingsen, loc. cit., p. 7

1915 *M. g.*, Kishida, loc. cit., p. 367

1928 *M. g.*, Kishida, loc. cit., p. 411

1932 *M. g.*, Beier, loc. cit., p. 149

目下の所日本特産カムシである。本州（靜岡縣富士山麓）から知られる。

5 *M. formosana* Ellingsen

1912 *M. granulata* var. *formosana* Ellingsen, *Nyt. Mag. f. Naturv. Christiania*, Bd. 1, p. 127

1920* *M. formosana*, Kishida, On a pseudoscorpion from Formosa, p. 3

1928 *M. f.*, Kishida, loc. cit., p. 411

1930 *M. f.*, Chamberlin, loc. cit., p. 30

1932 *M. f.*, Beier, loc. cit., p. 148, fig. 180

Ellingsen は臺灣高雄（打狗）から獲られた50程の標品に基き發表し Chamberlin も恐らく此の標品彙の一部と看做すべき2♀♀に就き調査した。岸田氏は基隆及び阿里山を産地に加へられた。臺灣各地に棲息する種類であらう。

更に Chamberlin は C. F. Baker が比律賓ルソン島 Mt. Makiling で採集の1♀をも本種に同定して居るから分布は比島にまで延びた。Beier は何故か "Formosa, Philippinen (?)" として居る。岸田氏1920年自刊の印刷物は既記の如く私は覽られない。

6 *M. pygmaea* Ellingsen

1907 *M. pygmaea* Ellingsen, loc. cit., p. 9

1915 *M. p.*, Kishida, loc. cit., p. 367

1928 *M. p.*, Kishida, loc. cit., p. 412, fig. 3

1932 *M. p.*, Beier, loc. cit., p. 149

目下の所日本特産カムシである。本州の静岡縣、山梨縣（共に富士山麓）、岐阜縣などで採集された。

7 *M. pusilla* Beier

1912 *Ideobisium formosanum* Ellingsen, *Nyt. Mag. f. Naturv. Christiania*, Bd. 1, p. 125

1932 *I. f.*, Beier, loc. cit., p. 160

1937 *Microcreagris pusilla*, Beier, *Mitt. Zool. Mus. Berlin*, Bd. xxii, Ht. 2, p. 268 fig. 1

本種は始め Ellingsen により *Ideobisium* 屬のものとして記載され Beier も一時それに準據したのである。後然らずして *Microcreagris* の1種なるに氣附いたが單に屬名だけを変更しては前出5と homonym になるので種名は廢棄され新に *pusilla* Beier が提唱された。臺灣の産で Beier は Koroton (地名) の標品を檢して居る。

予は本屬に入るべき標品若干を所持するので近き將來再報の機あるべきを約する。

V 主なる参考文献

- 1 Beier, Max Pseudoscorpionidea Kükenthal-Krumbachs Handbuch der Zoologie Bd. III, Hälfte II, pp. 117-192 (1932)
- 2 ——— Pseudoscorpionidea I Subord. Chthoniinea et Neobisiinea Das Tierreich, Lieferung 57, pp. 1-258, figs. 1-271 (1932)
- 3 ——— Pseudoscorpionidea II Subord. C. Cheliferinea do., Lieferung 58, pp. 1-294, figs. 1-300 (1932)
- 4 ——— Neue ostasiatische Pseudoscorpione aus dem Zoologischen Museum Berlin Mitt. Zool. Mus. Berlin Bd. xxii, Ht. 2, pp. 268-279, 11 figs. (1937)
- 5 Chamberlin, Joseph Conrad A Synoptic Classification of the False Scorpions or Chela-spinners, with a Report on a Cosmopolitan Collection of the same.— Part I. The Heterosphyronida (Chthoniidae) (Arachnida-Chelonethida) Ann. Mag. Nat. Hist. ser. (10), vol. iv, no. 19, pp. 50-80, 3 figs. (1929)
- 6 ——— A Synoptic Classification of the False Scorpions or Chela-spinners, with a Report on a Cosmopolitan Collection of the same. — Part II. The Diplosphyronida (Arachnida-Chelonethida) do., ser. (10), vol. v, no. 25, pp. 1-48, 3 figs. & no. 30, pp. 585-620 (1930)
- 7 江崎悌三 甲蟲に寄生するアトビサリ 動物學雜誌 vol. xxxiv, no. 410, pp. 974-975 (1922)
- 8 ——— 多足類蜘蛛類 (岩波講座生物學) [擬蠍類 pp. 34-39, figs. 33-38] (1930)
- 9 Kästner, A. Moos- oder Afterskorpione Die Tierwelt Mitteleuropas Bd. iii, Lief. 1, IV, pp. 1-13, 50 figs. (1928)
- 10 岸田久吉 カムシに關する研究 サイエンス vol. v, no. 9, pp. 362-369, 1 fig. (1915)
- 11 ——— 日本動物圖鑑 pp. 954-955, figs. 1844-1846 (1927)
- 12 ——— Pseudoscorpions (Microcreagris) of Japan Annot. Zool. Japon. vol. xi, no. 4, pp. 407-413, 3 figs. (1928)

- 13 ——— エドカクカニムシの産地 *Iansania* vol. i, no. 3, p. 39 (1929)
- 14 ——— カニムシ類分類上の標準 *do.*, no. 8, p. 124 (1929)
- 15 ——— シノツカカニムシに就て *科學畫報* vol. xxix, no. 6, pp. 112-115,
2 figs. (1940) [同じ頁の上欄に篠塚安久氏の「僕の好きな採集とカニムシの発見」
なる記事がある]
- 16 増田良秋 廣島市にて採集せる *Chelifer* の一種に就て 自刊 謄寫印刷 8 pp., 4 figs.
(1926)
- 17 Redikorzev, V. *Pseudoscorpions nouveaux. I.* *Ann. Mus. Zool. Petrogra-*
d, Tome xxii, pp. 91-101, 10 figs. (1917) [實際は1922年に發行されたのであると
云ふ]
- 18 ——— *Neue paläarktische Pseudoscorpione* *Zool. Jahrb. Abt. Syst.*
Ökol. u. Geogr., Bd. lxxv, Hft. 5/6, pp. 423-440, 19 figs. (1934)
- 19 Savory, Theodore H. *The Arachnida* [X The Order Chelonethi pp. 115-
127, figs. 60-68] (1935)
- 20 Schenkel, E. *Pseudoscorpionida (Afterscorpione)* *Die Tierwelt Deu-*
-tschlands, Teil 8, pp. 52-72, 33 figs. (1928)
- 21 植村利夫 新しい蜘蛛のお話(上)―(下) *東日小學生新聞* nos. 1056-1058
[(中)は「變りもの食ひのイソカニムシ」といふ題で no. 1057, p. 4 に掲出] (1940)
- 22 谷津直秀 日本産カニムシ類 *動物學雜誌* vol. xx, no. 238, p. 327 (1908)

(昭和21年3月20日識)